

## 3年次の実践・研究の成果と課題

研究委員長 鈴木 聡

2年次の実践・研究では、自らの学びに手応えや愛着をもち、自分事として問題解決に向かう姿や問題解決の過程で自分なりに「学びのものさし」を更新している姿が見られた。しかしながら、一人ひとりが切実感をもって自らの学び見つめ直し、よりよい問題解決に向けて学びを進める自律的な学びの場をさらに広げていくことが課題となった。こうした成果と課題を踏まえ、3年次では次のように重点を設定し実践・研究に取り組んだ。

### 重点 「学びのものさし」を働かせる学びのデザイン

最終年次である3年次は、一人ひとりが切実感をもって自らの学びを見つめ直し、よりよい問題解決に向けて選択・決定や試行錯誤しながら、学びを進めていくことのできる学びのデザインの具体化に取り組んだ。ここで重要となるのは、「学びのものさし」を働かせることは、一人ひとりが切実感をもって自らの学びを見つめ直し、よりよい問題解決に向けて選択・決定や試行錯誤するための手段であるという点である。

ここでは各教科等部の実践から得られた知見をもとに、3年次の成果と課題について述べる。

### 1 成果

(1) 熱意をもってよりよい問題解決に取り組む姿を引き出すしかけ

#### ①一人ひとりが自らの経験や興味・関心、学びやすさに応じて選択・決定できる活動の設定

一人ひとりが自らの経験や興味・関心、学びやすさに応じて、選択・決定できる活動を設定したことにより、問題解決に没頭する姿が見られた。例えば、次のような姿である。

- ・【国語科】読み取っていく教材文や書き進めていく文種など、学びを進めるための道筋を選び、解釈や表現を交流することを通して、必然性をもって自らの学びに立ち返り、自分の解釈や表現を捉え直す姿。
- ・【社会科】自ら立てた問いの解決のために選んだ観点や資料を基に、食糧問題や地域の歴史的事象について自分なりの意見や考えを本気になって説明する姿。
- ・【算数科】身の回りからこだわりをもって素材を見付け、問題解決の過程について表現したり、必要感に応じて仲間と考えを交流したりする姿。
- ・【音楽科】ゲストティーチャーや身近な仲間から自分にとってのモデルを見付け、そのモデルに近付きたいとよりよい表現を追究する姿。
- ・【図画工作科】自分に必要なタイミングでの対話や鑑賞を通して想像を広げ、自分なりの物語を紡ぎ表現する姿。



- ・【外国語活動】自分の興味やペースに応じて使いたい表現や取り組みたい方法を選び、モデルやICT機器の音声を活用しながら表現の幅を広げ、夢中になって互いに考えや気落ちを伝え合う姿。

このように、一人ひとりが自らの経験や興味・関心、学びやすさに応じて、教材、教具、観点や価値、素材や対象、調べる内容、表現方法などを選択・決定し、問題解決に没頭する姿が見られた。

## ②自ら立てた問いの解決に向けて探究できる問題解決過程

一人ひとりが自ら立てた問いの解決に向けて追究できる問題解決過程を取り入れ、単元を展開したことにより、切実感をもって探究していく姿が見られた。例えば、次のような姿である。

- ・【算数科】日常の事象から見付けた算数の問題を自分で選択し、集団内で誰とどのように学ぶかを自分で決め、試行錯誤しながら解き進める姿。
- ・【理科】単元で学んだことを活用する場面で、自分の立てた仮説について知識と体験を結び付け、目の前の現象について必死になって解き明かそうとする姿。
- ・【生活科】ゴールの達成に向けて自分が選んだ方法で対象と繰り返し関わることで、工夫を凝らしたり必然性をもって仲間と協働したりするなど、目を輝かせて活動を発展させていく姿。
- ・【体育科】身に付けてきた他種目の動きのこつと現在取り組んでいる動きのこつとを関連付けて考え、自分たちで見いだしたこつの共通点に手応えをもちながら活用する姿。
- ・【総合】自分たちの思いと現実の間に生じる壁に立ち向かい、思いの実現のために試行錯誤しながら粘り強く探究し、やり遂げる姿。



このように、自ら立てた問いの解決に向けて、切実感をもって探究していく姿が見られた。

## (2) 必然性を伴った学びの見つめ直しを促すしかけ

思考や表現を可視化し、そのずれや隔たりについて吟味・検討する協働的な省察の場面を位置付けたことにより、必然性をもって自らの学びを見つめ直し、思考を深めたり表現を豊かにしたりする姿が見られた。例えば、次のような姿である。

- ・【国語科】問題意識や活動の特性に応じたミニ・レッスンをきっかけに、必然性をもって本文に立ち戻り何度も読み返す姿やよりよい文章を執筆するための抛りどころを得る姿。
- ・【社会科】選んだ観点や立場が異なる仲間との情報交換をきっかけに、仲間の考えと関連付け自分の考えを補強する姿や自分にはなかった新たな視点を取り入れる姿。
- ・【生活科】活動の写真に書き込まれた評価や思いを見合うことをきっかけに、互いの活動をよりよくするためにどうしたらよいか知恵を出し合い、試行錯誤する姿。

- ・【体育科】手本の動画や実際の仲間の動きと撮影した自分の動きを比較することをきっかけに、自分の動きの改善点を探したり、友達のよい動きを見て、そのこつを発見したりする姿。
- ・【総合】互いの考え方や感じ方にはずれや隔たりがあることへの気づきをきっかけに、仲間からの評価を踏まえて自分の考えを見つめ直し、「人それぞれがもつ個性・価値観」や「働くこと」についての概念を更新する姿。
- ・【特別活動】1人1台端末を活用して可視化された互いの考えを共有することをきっかけに、提案理由や話合いの視点に立ち戻りながら話し合い、よりより合意形成を図る姿。



このように、可視化された思考や表現を比較することをきっかけに、必然性をもって自らの学びを見つめ直し、思考を深めたり表現を豊かにしたりする姿が見られた。

## 2 課題

### 問題解決に没頭し、自律的に学ぶ場面を広げるための授業デザイン

3年次の実践・研究を通して、自ら立てた問いの解決に向けて、熱意をもって探究していく姿、また、必然性をもって自らの学びを見つめ直し、思考を深めたり表現を豊かにしたりする姿が見られた。しかし、問題解決に没頭し、自律的に学ぶ場面をさらに広げることが課題である。そこで、学びに没頭する子どもの姿の実現につながる授業デザインの在り方について探っていく必要がある。目の前の子ども一人ひとりの学びに寄り添うために、指導者は絶えず自らの教育観を更新し続けなければならないことが見えてきた。そのために、事前の構想から事後の省察に至る授業デザインの要点を明らかにすることで、問題解決に没頭し、自律的に学ぶ子どもを支えていくことにつながると考える。